

富良野市 調査日時 6月27日～28日

- 1 活動名 27日 富良野市農場・富良野ファーム富田資料館
28日 富良野市 市役所（子育てママと農家を繋ぐ取り組みについて）

2 調査内容

農業労働力の高齢化や農作業ヘルパーの確保が年々難しい状況になってきていることから、将来的に農作業の担い手として期待できる農作業経験の少ない子育てママを就労に導きその後の定着をはかることを目的としている

3 調査結果

(1) 富良野の変革と労働力供給

- ア 当市では減反政策が始まる前の作付は稲作＋一般畑作物であった
- イ 減反政策が始まってすぐに野菜・果菜への転換を他の産地に先駆けて進め、玉ねぎ、人参を中心とした野菜産地を形成していった
- ウ 70年代にはホウレン草、レタス、キャベツ、さやえんどう
- エ 80年代にはメロン、スイートコーン、南瓜、アスパラカス等多品目産地へとになっていった
- オ 野菜産地として地位を確立できた背景には豊富な雇用労働力があつた。その確保先は周辺の産地から又は離農世帯の主婦からの「女工」であった
- カ 各JA、集荷業者は女工を確保し、玉ねぎ、人参の定植や収穫作業を大量の人手により行っていた
- キ 近年は女工の高齢化によって労働力供給小判が弱体化した

(2) 労働供給体制

- ア シルバー人材センター（単純～半熟練作業）
- イ JAふらの農作業ヘルパー制度（道外若年層、非熟練作業）
- ウ アグリプラン＝JAの子会社（高齢女性、熟練、露地作業）
- エ 外国人研修生（単純～半熟練作業）

(3) 労働力不足と確保の考え方

この10数年、熟練女工、相対常時雇用者の高齢化に加えて、若年から中年層の確保も困難さを増している

(4) 労働力確保の取り組み

- ア H25年までは労働力をうまく使っている事例等を紹介する研修会を実施⇒成果があがらず他の方法を検討することになった
- イ 供給先の検討・調査として富良野市農業の労働需要構造調査として北海道大学農学部と連携し平成24～26にかけて調査した結果子育てママを対象に「農業従事者意向アンケート」した結果子育てママの一部の農業従事意向がある者が確実にいることが判明

(5) 労働力確保のための試行

- ア 富良野市営農業活性化対策協議会のもとに「労働力確保対策部会」を設置し子育てママを確保する仕組みを検討及び試行をした
- イ 28年度 子育てママを対象にインターンシップを開催しこの場を通じたマッチングを試行（メロン農家・ミニトマト農家4で各1回実施 延べ12人が参加その結果農業従事者のイメージが予想以上に悪いことがわかったためイメージ改善が必要）
- ウ 29年度「子育て応援農家（受け入れ農家）」と「働きたい子育てママ」の登録制度を開催 子育てファームの登録農家がインターンシップ実施会場に来てそこで子育てママと面談し決

定ただし就労条件は相対で決定する方式にした

(6) 周知方法

- ア 子育てママが集まる場所でミニポスターを掲示、パンフレットを配布
- イ 市の広報媒体による周知
- ウ 民間媒体による周知
- エ 幼稚園のお便りとしてパンフレット配布

(7) 実績

- ア 子育て応援ファームの登録（メロン農家4件・ミニトマト5件計9件）
- イ 子育てママの登録（14名 うち10名が就労）

(8) 予算措置

- H28年富良野市営農業活性化対策協議会 34千円
- H29 " 200千円

(9) 所感

- ア 市内の他の産業も労働力不足があるなか、農業を選択してもらう条件や環境整備を今後どのように対応していくのか課題があると感じた。
- イ 受け入れ農家側が相手が子育て中心であることを理解して就農してもらうことの難しさはあるのではないかと等が考えられるが、反面子育てに悩む若いお母さんにとって、農作業をするということもさることながら、農家の人に話し相手となってもらい育児の相談や一部売れない野菜を頂いたり等、農家ならではの良さもあるのではないかと等、松本市の農家にとっても参考となった視察であった。